き　ら　ボ　通　信

第９号（２０１２年１２月）

明星大学ボランティアセンター（愛称：きらきらボランティアセンター）

特集１：２０１２夏の学生ボランティア活動報告会

特集２：被災地支援のあり方シンポジウム報告

****

「きらボ」の行事に参加して思ったこと

高重　正明

（明星大学　理工学部　総合理工学科　教授）

****

私にとってボランティア活動といえば、いわき明星大学の現代社会学科の有志が 2004 年の中越地震以来行ってきた災害ボランティア活動のことが、まず思い出されます。当時、同大学の学長であった私は、災害ボランティア一行の出発と帰還のたびに大学玄関に立って送迎の挨拶をしたものですが、印象に残るのは出発時と帰還時では学生たちの表情が一変することでした。出発時の今起きたばかりの寝ぼけ眼の気だるい感じが、帰ってきた時には、疲労困憊ではあるが一仕事やり抜いたという達成感に満ちた雰囲気に変わっていたものです。これこそ学校法人明星学苑の標榜する体験教育の効用と思い、この取組を当時大学基準協会が選定支援していた「特色ある教育支援プログラム」に応募までしましたが不採用でした。震災後の今となっては、とても悔しい思い出です。

2011 年 4 月以来、日野キャンパスに勤務することとなり、集まりがあると、時々参加をさせていただくようになりました。東日本大震災以後は、明星大学の学生や教職員をはじめ多摩地区からも多くの皆様が、いわきや東北各地でのボランティア活動に参加されていることを知りました。その活動の報告会などで、達成感のある活動ができたと話す学生たちの顔を見ると本当に頼もしく感じます。また、なかなか考えていたようには行動ができなかったというような話も聞くこともありますが、それはそれで現実の厳しさを知ったということで、むしろ進歩したと解釈すべきかと思います。

2012 年 4 月のシンポジウムでは、久しぶりにいわき明星大学の学生達にも会い、フラダンスまで見せてもらいました。懇親会では、私の講義を聞いたことがあるという学生が話しかけてきてくれて、とても嬉しい気分でした。また、大震災はとても不幸な出来事でしたが、この試練を自分の成長の糧にしようと思っていると話している学生がいたことには、本当に感激しました。このような交流の場をつくってくれている「きらボ」センターの活動に、心より敬意を表するものです。

特集１：夏の学生ボランティア活動

夏の学生ボランティア活動報告会２０１２

～出会い、ふれあい、そして学びあい～

去る 10 月 16 日に 28 号館 1 階プレゼンテーション室にて、「平成 24 年度夏の学生ボランティア活動報告会」を行いました。学内参加者は約 100 名、学外からも多くの方が参加してくださいました。

今年は、助言者として東京ボランティア・市民活動センターから吉田真也氏にお越しいただき、学内の福祉、教育、環境などさまざまな分野の 5 つのボランティア団体の学生たちが、「学生ボランティア活動のめざすものと課題」をテーマに、思い出深い夏の活動報告をしました。

報告会後、大学会館ボランティアセンター室にて交流会を行い、約 60 名が参加して下さいました。

【学外参加者】東京ボランティア市民活動センター、玉川大学、ネットワーク多摩、日野ケーブルＴＶ、日野市青少年委員、日野市社会福祉協議会、リレー・フォー・ライフ　ジャパン日野 2012、日野市青少年委員、東京都日野療護園、日野社会教育センター

【総評】　吉田　真也氏　（東京ボランティア・市民活動センター）

学生のみなさんがこの夏に経験した活動や、日常的に行っているボランティア活動について、みなさん自身のプレゼンテーションによって知る機会を得ました。ありがとうございます。

今回は 6 つの分野・団体から、9 つの活動について発表がありました。私はみなさんの報告を聞きながら、あらためてボランティア活動はクリエイティブで、人と人とがつながる社会的な活動なのだと感じていました。

活動の内容をもっと充実したものとするために、あるいは活動のなかで直面した課題を解決するために、みなさんは柔軟で自由な発想を生かしてさまざまな工夫をされていました。小さな工夫を積み重ねて活動をつくっていく力を感じました。

また、一緒に活動する仲間はもちろん、活動を通してさまざまな人たちと出会い、関わりが生まれていきます。関わりが増えていくと、時には人と意見がぶつかることもあるかもしれません。しかしそんな時こそ、お互いの違いや多様な価値観があることに気づくチャンスですので、じっくりコミュニケーションを取ってみてください。出会いに恐れず、また照れず、つながりを広げていってほしいと思います。

学生時代は、学生のみなさんが自分の時間を自由にデザインできる貴重な時期です。その貴重な時間を充てて行われるみなさんのボランティア活動が、より豊かになっていくことを願っています。

(1) 東日本大震災・災害ボランティア活動報告

《田野畑村　ボランティア》

大関　高旗（心理・教育学科心理学専修４年）

昨年三月に起きた東日本大震災、それによって被災された岩手県田野畑村の方々に一時でも楽しく過ごしていただくため、私たちは現地にて開催されたイベントの手伝いとして今年の八月、ボランティア活動に参加させていただきました。

当日は屋外の広場を会場とし、ピザ、スパゲッティ、ケーキ、流しそうめん、牛乳寒天の五種類の料理と飲み物を用意し、田野畑村の人々に振る舞わせていただきました。一つの料理につき一つのテーブルを用意し、各々のテーブルで自由に食事を楽しめるように工夫を凝らしました。また、1300 本のバラの花を会場に飾りつけ、持ち帰ることを希望された方にはプレゼントしました。

お越しくださった田野畑村の皆様は一様にして明るく、まるで被災などしていないのと同じようにイベントを楽しんでくれていました。そしてそれは、「本当はつらいのだ」という本音を打ち明けることなく、場の空気に合わせて明るい雰囲気を保持させてしまっていた我々の無力を裏づけるものに他なりません。

私たちは今回のボランティアをきっかけとして、三年生と四年生の間に必要だったコミュニケーションをすませ、充実した人間関係を築けました。田野畑村の方々も、一時的なものとはいえ楽しい時間を過ごせたのだと、誠に勝手ながらも信じさせていただいております。しかし、私たちが得られるはずだったもの、田野畑村の人々が得られるはずだったものは、それだけだったのでしょうか。一時の夢を見せるのではなく、現実に蓄積しているものの捌け口となる必要もあったのではないかという意見を、つい最近の話し合いの中で耳にしました。それこそが本当に、心理学を学んでいる私たちがやるべきことだったはずではないのかと。

私たちが今回のボランティアで得ようとしたものは、確かに得られたのだと思います。では、当初の目的にはなかった、「得られるはずだったもの」は、どうなったのでしょうか。

終わってからも未だ考えさせられることの多いボランティア活動でした。

《いわき明星大学との合同ボランティア研修》

羽村　望（人文学部　日本文化学科３年）

8 月 28 日～30 日の 2 泊 3 日でいわき明星大学との合同でボランティア研修に行きました。今回のボランティアは、昨年の 8 月と今年の 3 月を含め、3 回目になります。前回は湯ノ岳山に 1 泊 2 日、また学生 14 名という少人数での参加だったのに対し、今回はいわき海浜自然の家に 2 泊 3 日で学生 43 名にまで増えました。

活動内容として、まず 1 日目に今までの活動報告をし、レクリエーションを通し、メンバーと仲良くなることができました。2 日目は、フラワーセンター、ペット保護センター、パオ広場と活動場所を 3 つにわけて参加しました。私たちは、3 月に行った時もお手伝いさせていただいたフラワーセンターで、その時はバラの苗を植える作業でしたが、今回の活動内容は前回とは異なり、アジサイの枝切りや、マリーゴールドの花摘みのお手伝いをしました。最終日には、各グループと振り返りをし、ボランティア研修を終えました。

今回の合同ボランティアでは、いわき明星大学の学生を含めたくさんの人たちと交流しながら楽しく過ごすことができました。また、前回とは違う活動に参加できたことも、とてもいい経験だったと実感しています。

フラワーセンターでの活動

(2) 第６回むさし１００ｋｍ徒歩の旅

西原　知世（教育学部 教育学科　３年）

◆むさし 100ｋｍ徒歩の旅とは・・・

学生スタッフが中心となって、小学 4 年生～6 年生と夏休みに 4 泊 5 日かけて 100ｋｍを旅する教育体験学習事業です。子どもたちの「生きる力を育む」ことを目的としています。また、この事業は子どもたちのためと同時に私たち学生の成長のためでもあります。自分自身を見つめ直し、社会に認めてもらうために自己成長していかなければなりません。本事業の事前・事後研修を通して仲間とともに自分自身を成長し続けています。

◆第 6 回むさし 100ｋｍ徒歩の旅は 8 月 7 日に狭山市の智光山公園をスタートし、11 日に入間市の彩の森公園にてゴールしました。今年は小学生の参加人数 57 人、学生スタッフは 35 人をはじめ、実行委員さん、地域のボランティアさんを含み、総勢 120 人がこのむさし 100ｋｍ徒歩の旅に関わり、大きな感動を得ました。

◆1 日目、智光山公園で朝 8：00 から結団式をやりました。緊張な面持ちで、学生スタッフ紹介をはじめ、団長の話、完歩宣言をしました。

8：30 ころに出発し始め、100ｋｍの長い道のりのスタートを切りました。最初の休憩地で、初めての水掛けをしました。熱中症対策で首の後ろに水をかけてもらいます。これも学生の一員がやりやります。毎年熱中症になる子がいるので、今年はとても配慮をしました。休憩地で必ずアクエリを飲み、休憩 2 回に 1 回は差し入れで塩分の高いものをもらいました。1 日目は緊張気味の学生、子どもが多かったですが、ゴールの東吾野小学校では、安心の笑みを見せて無事 1 日目が終わりました。着いたら、第 2 バック争奪戦を行い、プールの準備です。プールでクールダウンし、夕飯はカレーでした。夜のレクレーションを楽しんで 1 日終了です。

◆最終日、とうとうゴールの日になりました。長いようで短い。みんなで歩けるのも最後だと思うと、気合が入り、みな最後まで全力で頑張りました。ゴール手前の休憩地で感極まり、泣いている学生、子どもも続出でした。ほんとに離れがたい最高の仲間との最高の 5 日間でした。

5 日間は無事終わりゴールしましたが、ここからがスタート！気持ちを新たに、この経験を活かして全員で決意を固めた日でもありました。

この 5 日間はほんとに悩まされ、困難にぶつかることも多かったですが、子どもの笑顔や言葉に励まされる 5 日間でした。

ゴールの集合写真

歩いているときの１シーン

(3) N.G.I[ネットワーク多摩学生委員会]

玉川大学 成田祐香（教育学部 教育学科４年）

私たちが企画・運営する「たまレンジャー」とは、多摩地域の自然・環境・歴史に触れる体験を通して、子どもたちに多摩を好きになってもらうこと、多摩地域に友達をつくることをコンセプトとしたイベントです。直に自然に触れる体験を通して、多摩の良さを知り、新しい発見や気づきを促しています。

今年８月に開催した第10回たまレンジャーは、初めての宿泊企画でした。１日目は大学セミナーハウスにて「自然と触れ合う自由研究」をメインプログラムにおき、様々な種類の活動を行いました。①アーティスト講師によるネイチャーアート、②花びらからの色水抽出、③科学実験的な、空き缶で飛ばそう！紙コップロケット、④ペットボトルビーズを用いてオリジナルアクセサリー創作、⑤ユーモアと才能はじけるフォトコンテスト、⑥ケナフの紙で作る手作りポストカード。この６つの中から、子どもたち自身が時間割を作成し、各々のカリキュラムを実行したので、とても満足できる内容だったと感想を頂けるほどの充実した内容でした。夜には、キャンプファイヤーと天体観測があり、第９回たまレンジャーで光害と星座に関するプログラムを行なったので、その番外編という形をとりました。第９回に参加してくれた子は、その際に作成した星座早見表を駆使して、星座の鑑賞を楽しみました。アイスブレイクやワードラリー、宿泊という体験を通して、大学生と参加者との交友関係を深められたことも、１日目の貴重な思い出です。

２日目は国営昭和記念公園に舞台を移し、ハンカチの花びら染めと多摩歌留多づくりを行いました。２日目から参加する子も多くいたなか、和やかな雰囲気を作り出せたのが「世界のことばを覚えようゲーム」でした。花びら染めの待ち時間に、参加者全員で完成させた多摩歌留多を使って遊んだところ、大学生も驚くほどの盛り上がりぶり。自分たちの発案した企画で子どもたちが楽しむ姿を見ることができ、学生主体のボランティア活動の醍醐味を味わいました。また、次回企画への大きな活力となる経験でした。イベント後も、花びら染めの完成品を写真で送ってもらったり、学生委員会が関わるイベントに参加してもらったりと“つながり”も生まれています。

次回の企画もすでに動き始めていますが、今回の反省と課題を生かし、さらに子どもたちが夢中になれる企画と運営を目指します。仲間と切磋琢磨しながら、子どもたちのこと、多摩のことをこれからも考えていきます。

１日目ネイチャーアート作品

２日目集合写真

(4) 緑地環境保全ボランティアサークルクローバー

三根　翼（理工学部 環境・生態学系　３年）

夏の活動内容は、東光寺裏の里山緑地保全とあきる野市でのサマーキャンプに加えて、文化祭に使用するサツマイモの手入れを地域の小学生と一緒に活動しました。

東光寺での活動は「カタクリ」という希少な花の保全を目的とし、日光を遮断する周りの雑草を刈りとり、春に花を咲かせる準備をしました。また、この土地では外来種の竹が繁殖し日光と養分を奪いとってしまうため、雑木林の木々を守るためにも繁殖しすぎた竹を伐採しました。真夏の雑木林では草木から体を守る対策と、蚊などの虫を避けるために長袖長ズボンでの活動となります。木漏れ日はあれど気温は高く、水分補給をこまめに行いながら作業をしました。切り倒した竹運びは重労働で過酷な作業もありますが、やり遂げた後の爽快感は言葉になりません。竹の伐採は以前から日野市の緑地保全活動で行われていたもので、明星大学でもお手伝させて頂いています。約２年の活動の末、今では鬱蒼としていた雑木林がすがすがしいほどに光の届く状態へと変化しました。

サマーキャンプでは屋代小学校の子どもたちと青少年の会の皆さんと一緒にキャンプをしました。今回はお手伝いスタッフとして参加させて頂き、東光寺で伐採した竹を使って流しそうめんの箸や筒を作りました。手作りの箸は愛着が湧くのか、みんな嬉しそうにそうめんを食べていました。少し休憩を挟んだ後は真夏のプールではしゃぎ、後に食べたアイスは格別においしく私たちも小学生のように喜びました。

夕飯は買い物から始め、カレーを作り食べた後は肝試しをして騒ぎました。一日が終わる頃、疲れ知らずの小学生たちはなかなか寝る体制をとらず、テントの中で遊びまわっていました。さすがに朝は眠そうにラジオ体操をしていましたが、朝食を食べた後は解散です。別れを惜しんでまた来年も来てくれるか、と尋ねられると嬉しさとさみしい思いが胸をよぎりました。

サツマイモの手入れはあきる野市の地域の方と小学生と一緒に真夏の太陽が輝く中、雑草取りをしました。収穫の約２割を頂けると言うことで、文化祭でサツマイモを使った料理を出店することを目標に活動していました。夏の雑草は成長が早く、適度な雨と降り注ぐ日光のおかげで、あっという間に繁殖します。元気な小学生たちと戯れながら雑草を刈り取り、子どもが数人隠れられる程の雑草の山ができました。お昼はおにぎりを食べて、いい汗を流せた活動でした。お陰様でスイートポテトのようなお菓子を作り、文化祭に出店することができました。

里山に咲く希少種カタクリの花

地域の小学生とさつまいもの手入れ

(5) ひまわり

永野有華（教育学部 教育学科　3 年）

明星大学ボランティアサークルひまわりは、七生福祉園を活動拠点とし、月に 2 回日曜日に障がいのある子どもたちと交流しています。活動場所である七生福祉園は明星大学から徒歩 5 分程のところにあり、その中でも私たちは、重度を除く自閉症やダウン症などの知的障がいのある 3 歳～小 4 の子どもが入園している低年一寮という場所で活動しています。

活動までの一連の流れは、まず平日の昼休みや放課後にミーティングを行い、子どもたちと何をするのか計画を立てます。その際に安全面にも考慮し、活動内容を決めます。安全面で考慮していることは子どもたちに、はさみ、液体のり、マジックなどの危険と思われる道具は使わず、楽しめるような遊びや工作を考えています。次に活動の準備をします。この段階で、はさみなど危険なものを使う作業を済ませておきます。そして、七生福祉園での活動に望みます。活動中の子どもたちは思いもよらない行動をとることもあるので、こちらが計画してきた通りにならないこともあります。その時は、こちらの計画に子どもを合わせるのではなく、子どもたちに合わせて臨機応変に学生が対応し、計画を変更していくようにしています。活動後には活動中に気づいた子どもの気になる部分や改善した方がよい点を話し合う反省会を行っています。反省会は二種類あって、活動後施設で職員さんを交えての反省会と、大学に戻ってから行う学生だけの反省会があります。ここでの反省を次に生かします。

活動では、最初に「はじめの会」を行い、子どもたちに活動の始まりを意識させます。活動時間は前半と後半に分け、前半は外遊びで主に園庭やアスレチックで自由に遊びます。外遊びの後はおやつ休憩を挟み、後半は中遊びをします。中遊びでは、絵本の読み聞かせ。工作、手遊びや宝探しなど学生が計画した遊びを一緒にやります。時間になったら「おわりの会」を行い、一日の活動は終わりです。

活動では、子どもたちとのふれあいを通して、毎回楽しく学んでいます。子どもたちは皆とてもかわいく、活動では自然と笑顔がいっぱいになり、子どもたちからたくさん元気をもらっています。職員さんもとても親切な方たちで、子どもとの関わり方や対応の仕方など、たくさんのことを教えて下さいます。ひまわりの今後の抱負として、これからも子どもたち一人ひとりを理解することを大切に、子どもも学生も笑顔で楽しい活動をしていきたいと思います。

七生福祉園での活動風景

(6) BUKAS ボランティアスタディーツアー

塩原　美香（教育学部 教育学科　１年）

私たち BUKAS は夏休みにフィリピン、カンボジア、ベトナムに行ってきました。「海外に行きたくて」、「カンボジアを自分の目で見たくて」、「強くなりたくて」等メンバー１人ひとり様々な想いでこのボランティアスタディーツアーに参加しました。

今回は、BUKAS として初めてベトナムを訪れました。ベトナムでは、クチトンネル(ベトナム戦争時のゲリラ基地)、戦争証跡博物館を見学し、リンスアンセンター(HIV 孤児施設)、ツーズー病院内リハビリ施設平和村を訪問しました。クチトンネルでは、戦争時にベトナムの人たちがアメリカ兵から逃げ隠れし生活していたトンネルや敵を苦しめるために作られた仕掛けを見ました。戦争証跡博物館では、兵士や枯葉剤の被害を受けた人たちの写真を見ました。どの写真も目をふさぎたくなるほど衝撃的であり、心が痛くなりました。ツーズー病院のリハビリ施設では、遺伝により枯葉剤の被害を受けている子どもたちと触れ合いました。どの様に接すればいいのか少し不安でしたが、楽しく遊ぶことができました。

リンスアンセンターでも子どもたちと触れ合いました。この施設にいるほとんどの子どもは AIDS を発症しています。でも、そのことを忘れるくらい元気いっぱいでした。

ベトナムを訪れて、戦争の悲惨さを改めて知り、子どもたちと触れ合う中で感じたことがありました。それは「今生きていることはあたり前ではない。」ということです。

健康な身体で生まれたこと、そして、今生きているということに感謝しなければいけない、感謝したいと思いました。何の豊かさをとって「恵まれている」というのかは分かりませんが、日本という国に生まれ暮らしている、きっとこんなにも恵まれている私たちは、今という時を精一杯生きなければならないと強く思います。

あなたにとって今生きていることはあたり前のことですか？こうやって日本で暮らしていると、この日々が「あたり前」かどうかなんて考えもしないくらいにあたり前すぎて忘れそうになるけれど、本当は「今こうして生きている」ということもこの日々も「あたり前」ではないんだということを忘れずにいたいです。そして、毎日を一生懸命に生きていきたいと思います。

今回はベトナムについて主に話させていただきましたが、私たちはフィリピンでもカンボジアでも多くの人に出会い、様々な場所に行って、たくさんのことを感じることができました。この経験を大切にしていきたいと思います。

ベトナムの HIV 孤児施設にて

特集２：被災地支援のあり方シンポジウ

3.11 から１年
いま被災地支援に望まれること−課題と展望−

去る 4 月 28 日(土)午後、シンポジウム「3.11 から１年　いま被災地支援に望まれること-課題と展望-」が日野校のアカデミーホールで開催された。（主催：明星大学ボランティアセンター、共催：いわき明星大学、後援：日野市社会福祉協議会）昨年 3 月 11 日に発生した東日本大震災から１年が過ぎた。しかし、被災地復興のためには依然として多くの課題が残されている。震災後、明星大学ボランティアセンターでは学生・教職員による支援活動をバックアップしてきた。震災後１年の時点で、被災地復興の課題とそれに向けてどのような支援が求められているかを考える良い機会となった。

このシンポジウムでは被災地の支援活動に取り組んでいるいわき明星大学との明星大学日野校の学生や教職員、宮城県気仙沼市大島の支援活動を続ける日野市内の NPO 法人の副代表理事が報告を行った。

はじめに津波被害などによって失った思い出を取り戻す「写真の復元プロジェクト」、現在も献血活動などのボランティア活動を行っている「学生赤十字奉仕」、被災者支援のための「東日本大震災被災者支援募金活動」の報告を行い、その後シンポジウムにて被災地の現状の理解を深めた。

シンポジウムには、いわき明星大学フラダンス同好会によるダンスがサプライズとして行われ、閉会となった。

【開会挨拶】　吉澤秀二(明星大学ボランティアセンター副センター長)

【学生による活動報告】

①　「写真の復元プロジェクト」　穂積綾香(明星大学情報学部情報学科４年)

東日本大震災の津波により汚れてしまった写真の大切な思い出を甦らせようと考え、復元をしている。主な作業としてはデジタルカメラを使用した写真の複写や塩分や砂、泥を落とす写真の水洗浄、洗浄後の写真のスキャナによるデータ化、写真の傷ついた部分の Photoshop や GIMP によるデジタル修正などがある。

②　「学生赤十字奉仕部」　本宮滉也(いわき明星大学人文学部心理学科３年)

いわき明星大学の学友会に所属している団体の１つである。東日本大震災前から、主に地域ボランティアと献血活動を行ってきた。震災後は週に１度中央台久第１仮設住宅の集会所で子どもたちと遊んだり、学習支援を行ったりして様々な年代の人たちと関わることができた。

③　「東日本大震災被災者支援募金活動」　泉田正悟・坂本翔吾(明星大学人文学部日本文化学科２年)

3 月 11 日以降、毎月 11 日を「募金の日」と定め、有志の学生数名の呼掛けで高幡不動駅前にて募金活動を１年間実施した。募金総額：837,221 円。

【シンポジウム】

司会：渡戸一郎(明星大学人文学部教授　ボランティアセンター長)

パネリスト：原一宏氏(NPO 法人水と緑の環境ネットワークの会副代表理事)

高木竜輔先生(いわき明星大学人文学部現代社会学科准教授)

黒岩誠先生(明星大学人文学部心理学科教授)

【閉会挨拶】　上遠野美香(いわき明星大学ボランティアセンター センター長)

【交流会(茶話会)】会場：大学会館２階ボランティアセンター　進行：畑野理美

主催：明星大学ボランティアセンター

パネリストの方々による発表

NPO 法人　水と緑の環境ネットワークの会　原一宏氏

昨年３月の震災後、以前訪れた宮城県気仙沼市大島での支援活動を行った。気仙沼大島支援プロジェクトを立ち上げ、代表に就任。初期の緊急支援から、瓦礫撤去計画、通信環境復旧、産業・観光復興に深く関わってきた。①「被災地での支援」では支援における信用と信頼、常に変化するニーズ、ボランティアの力という観点から、②被災地の困難として、被災者の方々の感情や疲れ、また震災により様々なものを失ったことによる将来への不安、③被災地の現状として“雇用”という大きな課題について言及した。そして「今できること」として、まず継続した支援が重要性で、また、ただ支援をするだけでなく、被災者の方々の自立を促すための仕掛けをしていくことを強調した。そして、最後に、一人一人が被災地に対してできることについて話した。

いわき明星大学人文学部　高木竜輔先生

今回の東日本大震災が通常の自然災害とは異なる復旧・復興の動きを示す要因は福島第一原発が津波による被害を受けたことにある。福島第一原発が津波による被害を受けたことで、当時原発から 30km 県内の住民は避難を余儀なくされた。それは自治体も例外ではなく、行政機能もまるごと他地域へと避難することになった。現状として、現在でも原発から 20km 圏内が警戒区域に指定され立ち入り禁止されており、原子力災害からの復興はほとんど手付かずのまま進んでいない。避難した住民はただ生活を落ち着かせることに追われた１年間であった。住民の居住地は落ち着きあるものの、失われた雇用を取り戻すことや、分離した家族を結びつけるまでには至っていない。最後に、今後の支援のあり方については、物資などは整いつつあるため、それよりもさらに今後重要になるのは、避難者同士のつながりを回復するためのサポートである。また、慣れない場所で避難生活を送る方へ、ボランティアなどを通してのふれあいの中で話を聞き、精神的な支援を行うことができるのではないか。

明星大学人文学部 黒岩誠先生

学生時代から縁のある田野畑村を今回の震災がきっかけで、40 年ぶりに訪れた。田野畑村は固有な文化があり、それがコミュニティーの結束を強固にし、外部への依存を極端に抑制している。そのような特性が震災によって、自助の文化と同時に抑制の文化が強調され、コントラストが非常に鮮明になった。このような「コミュニティー依存の文化」の中で皆が地域コミュニティーの回復を求めていた。それには外部からの介入が必要であったため、外部からの支援を受け入れる敷居を低くすることが課題であった。実践活動としては、まず「バラ作戦」と題して週に１回水曜日、全戸にバラを配る活動や、「ムーミン谷のお食事会」として高台においての食事会を開催した。バラ作戦に対しては、アンケートからバラをとても大事にしていただけたことがうかがえた。お食事会には約 200 名の住民の方々が参加して下さった。

学生活動現場から

多摩シネマフォーラム『隣る人』上映会

竹内　夏菜（教育学部 教育学科　３年）

８月 25 日、多摩市永山にあるベルブホールにて刀川和也監督の『隣る人』の上映会を行いました。『隣る人』は８年間におよび児童養護施設の日常を追い、淡々としていながらも確かな人の温もりや寄り添い続ける誠実さを画面の端々から感じられるドキュメンタリー作品です。今回、私は多摩シネマフォーラム実行委員（毎年多摩市で映画祭を主催）の活動の一つとして上映会に携わらせていただきました。

映画を“観る側”から“上映する側”に回って感じたことは、映画を観に行くという行為のハードルの高さです。映画はわざわざ映画館に行かなければ観られないものではなく、レンタルすればいつでも家で観られるものになりました。そして映画以外のあらゆる娯楽が増えた今、映画館に行くという行為は、数多くある時間の過ごし方の一つでしかなくなってしまったように思います。その中で、わざわざ時間を確保して劇場に足を運ぶという行為はもしかしたら面倒臭いことなのかもしれません。だからこそその価値がある作品であるということをどのように伝えるかという点に苦労しましたし、自分が作品から得た想いをどう活動に反映させるかが私の課題でした。幸い、今回の上映会では実行委員の頑張りや、さまざまな方のご協力もあり、予想を上回るお客様に足を運んでいただき、大盛況の内に終えることができました。

誰かに何かを伝えることはそう簡単なことではないのかもしれません。それでも、映画から得た感動を自分の中で終わらせるのではなく、「もっとたくさんの人に観て欲しい」という想いを形にする場があること、作品とそれをまだ知らない誰かの出会いを作ることができるということは、こんなにも胸が熱くなることなのだと知りました。上映後もまだ反響があり、個人的に「あの映画よかったね！」という声をいただけると、上映したら終わりというわけではなく、こうして広がり続け繋がり続けていくのだなと感じます。今後も作品やお客さんとの更なる出会いがあるのだと思うと、わくわくします。

ひの新撰組まつり

榊原 里奈（人文学部 人間社会学科 3 年）

5 月 13 日日曜日。雲一つない蒼穹が映える、まるで初夏を思わせるような気候のなか、「第 15 回ひの新選組まつり」の二日目が開催されました。

日野市は、幕末期に活躍した新選組の副長、土方歳三や六番隊長の井上源三郎らの出身地であり、新選組にまつわる様々な名所がある「新選組のふるさと」として有名です。

ひの新選組まつりはコンテストで選出した局長近藤勇、副長土方歳三、以下一番隊から十番隊までの各隊長各を筆頭とし、一般公募から募った隊士が日野市内を練り歩きながら出し物をするイベントです。大河ドラマで新選組が起用されたことや、マンガやアニメ・ゲームなどの影響などを受け、年々その規模を拡大しています。特に今年のひの新選組まつりは、前年に起こった東日本大震災の影響により第 14 回目の開催が小規模になったこと、今回から“歴装隊”と呼ばれる新選組をモチーフとしたゲーム作品の仮装をした一団が加わったことにより、隊士だけで 900 名以上の参加となりました。

今回私たちMCATは各隊の介添人としてまつりのお手伝いをさせていただきました。日頃から市内でガイドをされている方々と組んでの介添だったため、午前の高幡不動尊会場から午後の日野会場へのバス移動や、パレードやパフォーマンスのタイムテーブルが各隊ごとに異なるため動きが複雑など、難しい場面も多々ありましたが、そこまで気負うこともなく、仕事に励むことが出来ました。

当日は服の襟ぐりの形にくっきりと日焼けしてしまうほどの晴天だったため、慣れない着物や甲冑に身を包み、長時間練り歩かなければならない参加者の体調が懸念されましたが、そんな運営側の心配を余所に、現場では快活な声と溌剌とした笑顔、そしてパワフルな勝鬨の声が飛び交っていました。

運営・参加者ともに士気は高く、全ての日程を順調に終えることが出来るかと思われましたが、午前の行程の最中、会場の一つに爆弾を仕掛けたという脅迫電話があり、午後に行う予定だった催しを全てキャンセル。パレードも急遽縮小して行う事態となってしまいました。

バス移動の直後集められた小学校の校庭で、私たちはその旨を聞かされました。代表者の悔しさに声を震わせながらの説明と謝罪の言葉に、参加者から励ましの言葉や拍手が自然と湧き上がり、午後の行程では参加者の間に異様な熱気と団結力を感じました。それぞれ思いの原点は様々だったかと思いますが、「この祭りを成功させたい」という気持ちは共通であり、結果として例年以上の熱気と活気を見せたように思います。

予定していたすべての行程を全うすることが出来なかったという遺恨は残りましたが、長い道のりを共に歩き切った絆は深く、最後には介添人でしかなかった私もまるで初めから一般参加者であったかのように記念撮影の輪の中に入れていただき、参加者の皆さんと共に別れを惜しみ再会を約束しました。

ひの新選組まつりは地域の歴史に思いを馳せる貴重な時間であり、同時に新たな出会いや絆が生まれるとても貴重な場でもあります。出来ることなら来年以降も、日野市を愛する者として、また新選組を愛するものとしてこの祭りに何らかの形で携われていけたらと思っています。

☆センター活動報告☆

ここでは 2012 年 4 月以降の本センターの主な活動と、ボランティアセンター団体登録の状況について報告します。

2012 年 4 月からの主な活動

月	日	行事等
4	3	横尾洋くん募金についての説明会　参加者 3 名
4	4	第 1 回手話講習会　参加者 7 名
4	10	来室：八王子教育センター、八王子市教育委員会、いのちの電話、日野警察
4	11	来室：日野市社会福祉協議会
4	13	来室：ＮＰＯ法人 陸前高田支援の会
4	17	来室：洋くんを救う会
4	18	来室：いのちの電話、洋君を救う会
4	19	来室：洋くんを救う会
4	20	来室：日野療護園、洋くんを救う会
4	21	来室：夢ふうせん、洋くんを救う会
4/2～4/24		ボランテイア保険説明会　参加者数のべ 104 名（日野市社会福祉協議会 8 名）
4/11～4/24		ノートテイク講習会　参加者のべ 10 名
4	26	来室：日野市少年学級
4	28	「被災地支援のあり方シンポジウム」開催　全体参加者 94 名。交流会参加者 64 名
5	7	来室：日野市環境保全課、多摩療護園
5	8	ＭＣＡＴ防犯講習会（講話　日野警察生活安全課　神田課長）　参加者 16 名、来室：日野市青少年委員会、水と緑のネットワーク、日野警察
5	9	第 2 回手話講習会　参加者 14 名
5	10	来室：新撰組まつり実行委員会、日野市環境保全課
5	15	第 2 回学生ボランティアグループ会議、来室：新撰組まつり実行委員会、日野市町づくり部産業振興課観光係、日野市環境保全課多摩療護園
5	18	来室：多摩療護園
5	21	来室：原発いらないパレード日野
5	22	第 3 回学生ボランティアグループ会議
		来室：公共財団法人東京都市町村自治調査会、多摩療護園、日野療護園
5	23	第 3 回手話講習会　参加者 17 名、来室：七生中地区青少年育成会、南平ふれあいサロン
5	24	来室：洋くんを救う会、洋くんご両親
5	25	来室：ＮＰＯ法人六日町環境協会
5	28	来室：洋くんを救う会
5	29	来室：多摩療護園
5	30	来室：東北を支援する日野市民の会、ひの社会教育センター

5	31	来室：財団法人野外教育研究財団
6	1	来室：あきる野自然塾運営委員会
6	4	来室：日野市環境保全課、多摩療護園
6	6	第 3 回手話講習会　参加者 13 名
6	8	来室：東京外語大学ボランティア活動スペース
6	11	来室：筑波大学付属聴覚特別支援学校
6	12	来室：日野市青少年委員、多摩療護園
6	13	来室：日野市社会福祉協議会
6	14	来室：六日町観光協会
6	15	来室：八王子青少年委員
6	16	来室：日野市しごとパートナー
6	18	来室：食農いのち
6	19	来室：勝ち王子教育委員会、多摩療護園
6	20	第 4 回手話講習会　参加者 9 名
6	21	来室：興望館、昭和大学付属烏山病院
6	22	来室：シャプラニール
6	26	来室：やまぼうし、あきる野自然塾運営委員会、毎日新聞
6	27	来室：日野警察、多摩療護園
6	28	来室：マザアス（日野市万願寺）
7	2	来室：神田外語大学、南観光
7	3	来室：南観光、ネットワーク多摩
7	5	来室：日野市社会福祉協議会、日野療護園
6/25～7/5		学生ボランティア活動紹介　参加者のべ 131 名
7	6	来室：多摩療護園、日野市青少年委員会
7	10	来室：日野市青少年委員、ＶＣＡＳ
7	11	来室：ひの市民活動連絡会、光の家
7	13	来室：ＮＰＯリサイクルネットワーク、音楽療法士たたら先生
7	17	来室：マザアス、グループホームたまだいら、筑波技術大学
7	19	来室：こまえボランティアセンター
7	20	来室：東京市町村自治調査会、日野少年委員会
7/9～7/20		昼休みミニ講演会　参加者のべ 144 人
7	26	東日本大震災学生ボランティア活動報告会　全体参加者 45 名　交流会参加者 30 名
7	31	いわき明星大学との合同ボランティア研修説明会　参加者：学生 35 名　教職員 5 名
8	1	第 1 回手話ランチ講習　参加者 6 名、梁プランニング
8	7	来室：練馬区立開進第二中学校
8	9	来室：スキッパー、日野市社会福祉協議会、ＮＩＣＥ
8	10	来室：日野市青少年委員
8	23	来室：南平ふれあいサロン

8　　27	来室：多摩療護園、東京都社会福祉事業団
8/28～8/30	いわき明星大学との合同ボランティア研修　参加者：学生 43 名　教職員 6 名
8　　31	来室：日野社会教育センター
9　　7	第 1 回パソコンテイク講習会　参加者 7 名
9　　11	来室：日野市環境保全課
9　　12	来室：南平ふれあいサロン
9　　13	来校：練馬区立開進第二中学校　生徒 8 名　教員 1 名
9　　14	来室：日野市防災課
9　　20	もみじまつり参加
9　　25	来室：南観光
9　　30	市民活動フェアー参加

◆ボランティアセンター登録団体（2012 年 11 月末現在）

学内	19 団体	①教育研究部　②ボランティアサークル「めばえの会」　③初等教育研究会 どろんこの会　④ボランティアサークル「SMILY」　⑤Ｉdear 研究会　⑥ひまわり　⑦へき地教育研究会　⑧児童文化研究会「人形劇団まめ」　⑨BUKAS　⑩Star☆shops　⑪防犯ボランティア隊 MCAT　⑫「Rainbow sign」　⑬Meisei Clean Project　⑭緑地環境保全ボランティアサークル「クローバー」　⑮NPO 法人フレンドシップキャンプ　⑯Merci　⑰大道芸団マアム　⑱N.G.I（ネットワーク多摩学生委員会）　⑲むさし 100km 徒歩の旅
学外	97 団体	1～69　省略 70:知的障害者厚生施設（通所）すずかけの家（日野市南平）　71:ちーむ夢人間　にこにこキッズルーム（調布市小島町）　72:NPO 法人　ACTION（武蔵野市境南町）　73:特定非営利活動法人　フレンドシップキャンプ（中央区築地）　74:公益社団法人　シャンティ国際ボランティア会（新宿区大京町）　75:NPO.JRC　ちびっこ龍馬元気の会（高知県高知市帯屋町）　76:NPO 法人 CES　八王子生活館（八王子市南町）　77:社会福祉法人　多摩養育園（八王子市八木町）　78:介護老人保健施設　クローバー（日野市東平山）　79:社会福祉法人　東京援護協会　サルビア荘（町田市図師町）　80:特定非営利活動法人　花岡児童総合研究所（三鷹市上連雀）　81:日野市立　はくちょう（日野市日野台）　82:日野市　少年学級（日野市程久保）　83：社会福祉法人　同愛会　日の出福祉園（あきるの市秋川）　84：国際ボランティア学生協会（世田谷区宮坂）　85：虹のセンター25　（昭島市朝日町）　86：特定非営利活動法人ナイス（新宿区新宿）　87:Youth for 3.11（杉並区南荻窪）　88:秋川北口会（あきる野市秋川）　89:NPO 法人　陸前高田市から未来を考える会（江東区南砂）　90:あきる野自然塾運営委員会（あきる野市小川）　91:東京恵明学園　児童部（青梅市友田町）　92:特定非営利活動法人リサイクルネットワーク（日野市多摩平）　93:（社）マザアス　グループホームたまだいら（日野市多摩平）　94:緑を愛する会　日野（日野市日野）　95:由木かたくりの会（八王子市堀の内）　96:府中市発達障害児親の会　虹色てんとう虫（府中市是政）　97:きらきら☆たねまきの会（神奈川県相模原市緑区）

◆明星大学ボランティアセンター運営委員会の構成　（2012 年 11 月末現在）

役　　職	氏　名	所　　属
センター長	渡戸　一郎	人文学部　人間社会学科　教授
副センター長	吉澤　秀二	理工学部　総合理工学科 環境・生態学系　教授
センター長が必要と認める者	黒岩　誠	人文学部　心理学科　教授
	加藤　めぐみ	人文学部　福祉実践学科　教授
	星山　麻木	教育学部　教育学科　教授
	菱山　覚一郎	教育学部　教育学科　教授
	安田　満	経済学部　経済学科　講師
	川原　万人	情報学部　情報学科　講師
	榊原　八郎	造形芸術学部　造形芸術学科　教授
	名取　淳	ボランティアセンター担当事務局次長
	村山　光子	学生サポートセンター長
	吉川　和博	青梅事務室　課長
事務局長	赤山　徹	
専任職員	吉田　雅行	日野校　ボランティアセンター主幹
	畑野　理美	日野校　ボランティアセンター主任
オブザーバー	石田　健太郎	教育学部　教育学科　助教
	川端　伸哉	日野校　ボランティアセンター
	河原　孝明	青梅事務室

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ *編集後記* ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

東日本大震災より早くも1年以上の時が過ぎました。そうした今でも学生による被災地支援の活動は活発に行われています。支援を一過性のもので終わらせるのではなく、継続して行動し続けるということが、本当の意味での“支え”や“学び”に繋がっていくのだと改めて感じました。(竹内夏菜)

学生たちのボランティア活動は、増々、広がり、多くの助成や感謝状をいただきました。あらためて、色々な方とつながり、広がってきているんだなぁと実感しています。ひとつひとつの活動や、出会いを大切にして、積み重ねていってほしと思います。大変なこともあるかもしれませんが、そんな時こそ、みんなで相談し乗り越えてください。きらボは、みんなのことをいつでも応援しています。(畑野理美)

きらボ通信／第９号

2012 年 12 月 25 日発行

明星大学ボランティアセンター

日野校

〒191-8506　東京都日野市程久保 2-1-1　明星大学日野校 22 号館 203（大学会館２階）

Tel:042-591-6231（直通）　Fax:042-591-6261　E-mail: kiravo@gad.meisei-u.ac.jp

青梅校

〒198-8655　東京都青梅市長淵 2-590　明星大学青梅校 青梅事務室　1 階

Tel:0428-25-5111（代表）　Fax:0428-25-5182　E-mail: kiravo@agora.meisei-u.ac.jp